

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二一九〇四 電話・FAX(03)3299-5367

郵便振替 〇〇一〇〇―九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■巻頭言■

岩波文庫90年と日本の文化

伊勢 太郎 … 2

社会主義にこそ未来がある 鈴木 賢二 … 3

―『資本論』研究会が新年を迎えるにあたって思うこと―

『共産党宣言』と現代資本主義 編集部 … 5

―「グローバルバリズム」ということ―

春闘の変質と再生への途(上) … 9

読者からのおたより … 11

旬刊 社会通信

NO.1233

二〇一七年二月一日号

二〇一七年二月一日発行
(毎月一日・十五日二回発行)

岩波文庫 90年と日本の文化

岩波は元日の朝日に全面広告「岩波文庫創刊90年」をのせた。岩波は戦前、改造社と戦後は「日本文化」を代表する出版社としてあった。岩波書店に隣接してあった「ブックセンター信山社」が昨年末、店を閉じた。岩波の出店ではなかったが、岩波が出す書籍のほとんどを揃えていた。神田に行くとき古本屋をめぐる、最後に信山社を臨き、『図書』（月刊）を「いただきます」と、帰宅の楽しみとした。

昨今、客足は絶え、文化への華やかさは闇におおわれるかであった。これは、東京駅八重洲南口にある日本最大の「八重洲ブックセンター」にも感ぜられる。街の本屋はとつくの昔岩波の書籍をおくことをやめた。理由は二つ、一つは買い取り制であること、二つは岩波の本が読まれなくなった。看板雑誌は「世界」と「思想」、大きな本屋でもおかないところがふえた。目にするのは図書館である。

こんな中で全面広告である。岩波文庫のいわれ、世界の古典発刊数が累計六千点におよんだことを祝いあい、『古典』は、古いがゆえに古典ならではのありません。その時代の課題を深く追求し、多くの読者の支持をうけ、次の時代を切り開く力を持っていたからこそ、古典になる」と説く。刷られてすぐ裁断されたり、買いはしたがゴミ箱、ブックオフ行きが市場を圧するなか、古典を堅持する気概を良としたい。

岩波文庫創刊は一九二七年七月、一挙に二三点二三冊が発行されている。邦書は十一点、「おらが春」（一茶）、「病状六尺」（仰臥漫録）（子規）、「こころ」（漱石）、「五重の塔」（露伴）、「北村透谷集」、「号外地六篇」（独歩）、「にこりえ・たけくらべ」（一葉）、「藤村詩抄」、「幸福者」（実篤）、「出家とその弟子」（百三）。翻訳はトルストイ「戦争と平和第一巻」「闇の力」「生ける屍」、チェーホフ「伯父のワーニャ」「桜の園」、「プラトン ソクラテスの弁明」「認識の対象」（リッケルト）、「科学の価値」（ポアンカレ）、「実践理性批判」（カント）など十二冊、学生、文化人そしてインテリが最大の読者層であったことを告げる。みなさんはどの本を読んでらっしゃいますか、そして書架にどれほど残されておりますか。

おもしろいのが岩波文庫でいちばん売れている（「読まれている」とはいいない）のリスト。「坊っちゃん」「こころ」はだれもが予想するところ、ビックリさせられるのは「ソクラテスの弁明」「論語」「善の研究」そして「歎異抄」に「古事記」と、歯が折れてしまいそうな固い本に、アレはどうしてと不思議なのが「銀の匙」（中勘助）。この本、古本屋にあふれている。教材になっているのかも。

嬉しくびっくりさせられるのが『共産党宣言』です。なんと七位にランクされている。向坂先生が存命の時一九八〇年代前半までは『坊っちゃん』と『宣言』が売れ筋トップを競っていたとのこと。ある人曰く『宣言』が売れるのはいいことだ、しかしだがどのようによんでいるのかね」と。日本の文化・思想状況からすれば「悲観的」になりがちだが、岩波文庫の六千点は、次の文化を引き継ぎ、進化させていくだろうことに「確信」をもちあう時かもしれぬ。最近の読書でもっとも考えさせられたのが『ヘーゲルとその時代』（岩波新書、二〇一三年）だった。（伊勢太郎）

社会主義にこそ未来がある

— 『資本論』研究会が新年を迎えるにあたって思うこと —

三つのキーワード

今回は、以下3つの言葉をキーワードに、今後の世界情勢と日本について考えてみたい。

① 「鳥瞰」チョウカン（鳥のように高いところより全体を見渡す）

② 「俯瞰」フカン（高い所から下をながめる）など

③ 「瞰制高地」カンセイコウチ（軍事用語で、作戦を立てる場合などに、高地を確保して、全体を見渡し、攻撃目標を定めること）

以上の言葉は、いずれも高いところから全体を見下ろして考えると言う意味である。今回私も少し高い所（曳舟スカイツリー）に登ったつもりで経済・社会情勢を見下ろしてみたいと思う。高い所から見下ろすとは、上から目線と言うことではありません。マルクスは「学問に坦々たる大道はありません。学問の急峻（きゆうしゅん）な山路をよじ登るのに疲労困憊（ひろうこんぱい）をいとわぬ者だけが、輝かしい絶頂をきわめる希望をもつのである」『資本論』第一分冊三六頁（フランス語版にたいする序文の後書）に書いていますが、そのような気持ちで学習を続けていけば、私のような凡人でも、少しは全体を見渡せる人間に成長して行けるのではないかと思います。思いで書きます。

学習を続けていけば、「地面をはいつくばって嘆き悲しんでいる自分」から、少しは全体を見る目が養われ楽天的に生きていかれ、自分も成長出来るのではないかと思いますし、学習以外にそれをきたえることはできないと考えたからであります。

資本主義社会 生産関係極限に

さて、それでは全体の状況を私なりにどのように見るかといいますと、まず、第一に資本主義世界体制についてですが、アメリカを始め英国、フランス、ドイツ、韓国、日本など、先進資本主義はいずれも、商品生産が停滞して、長い不況にさいなまされ、国内労働者も低賃金や雇用不安が長年続き社会不安が高まり、改善の萌しさ見えません。

この状況はかつて第一次帝国主義の時代と似たような状況にあるといえます。国内の商品生産の停滞、金融資本の横行（ヒルファーディングの『金融資本論』出版一九一〇年）、独占資本の発生と海外市場の確保など、グローバル経済の展開、そして保守主義の台頭、大戦へ、などなどです。私達は戦後生まれの人が多く、レーニンが帝国主義論を書いた時代（一九一七年、第一次大戦・第二次大戦）頃の、資本主義「帝国主義」時代を知らないのです。現代を「新自由主義」などと認識していますが、帝国主義の時代は二度にわたる大戦で終わり、戦後資本主義は国家独占資本主義として発達・発展してきましたが、いまや、国家独占資本主義そのものが行き詰まり状態に陥り、旧時代（帝国主義時代）と、同じような現象を作り出している、金融資本活発な動きや世界貿易など、現象的には、似たような状況を作りだしているのです。

国家独占資本主義の後には、もはや社会主義しかありません、帝国主義より以前の自由主義時代への逆流であるとする「新自由主義」は幻想です。現在、帝国主義時代の末期に似たような現象を出現しているのは、先進資本主義経済もそこまで、すなわち資本主義経済そのものが非常に困難な状況に成っている現れに過ぎないと思いません。

社会主義社会 苦難の行進

一方、社会主義国はどうでしょうか。まず、ソビエト連邦の社会主義は崩壊してしまいました、よくアメリカCIAの仕業とか、ゴルバチョフの反革命論、あるいは、スターリニズムの問題などが言われますが、社会主義経済のあり方から、問題を批判したり、考察するのは少ないと思います。すなわち社会主義「経済」の面から、どうだったのかを考える見方が少ないと思います。

ソ連や中国では世界の歴史上、初めて社会主義体制を勝ち取り、国家が中心となり「社会主義的」経済運営がされてきました。未経験の経済社会の建設でした、日本でも過去には幕末から明治維新（資本主義革命）を経て、封建社会の経済運営から、資本主義的経済運営が根付くまでは何十年も、ほぼ明治時代全体を要したのではなかったか。

労働者階級が政権を執って社会主義革命が起こったとしても、資本主義経済からすぐに社会主義経済に移行出来るわけではない、社会主義経済が根付くまでには相当長い年月がかかる。社会主義経済の特徴は、資本主義経済の業病である恐慌を起さないう「計画経済」のことで、そして資本主義経済の時代と違って、人間が資本の奴隷として生きることがなくなるとしたことです。だからマルクスは資本主義時代までを人類の前身、『経済学批判』で、ブルジョアの生産諸関係は、社会的生産過程の最後の敵対的形態である。この社会構成でもって人間社会の前身は終わるとしています。

私達労働者階級は人類の歴史上未踏の社会主義経済のモデルとして、ソ連が最初に成し遂げた経験から、「ソ連・東欧型」社会主義の計画経済システムを、中国や他のアジア社会主義も当初はこの形だったでしょう、その後中国は、一国二制度の社会主義経済システムを採用しています。

日本資本主義 「デフレ」という恐慌

日本資本主義の状況は第三次恐慌である一九九〇年代のバブル崩壊の（恐慌）以降企業数も横ばいで、赤字企業は次第に増え、四次恐慌であるリーマン・ショック（二〇〇八年）をへて、大手・中小を含めて七〇％を越え赤字企業が増大し、黒字経営はわずか一五％程度に至っている。バブル崩壊以降失われた一〇年はくいまや三〇年にも続いている。

これを経て、現在日本の働く人達のうち非正規労働者は約二千万人に至っています。賃金収入も、年収三〇〇万以下の人が一九一一人にもぼり生活が破壊されています、テレビでは毎日のように美味しい食事の場面が報道されていますが、その陰で、インスタントラーメンで簡単に食事を過ごしている方が多くなっているのではないでしょ

うか。流行語大賞になった「保育園落ちた 日本死ね！」が、本当の日本の現状ではないのでしょうか。

バブル崩壊（恐慌）以降すでに二六年を経過しているのですが、黒田ノミクスなる膨大な通貨増刷政策を国家と独占資本が組んで実施したにもかかわらずいっこうに景気回復の兆しは見えない。

私達はマスメディアに踊らされて、社会主義批判をするのではなく、資本主義の行っている経済批判をもっと本格的にしなければなりません。逆に、不十分ながらも社会主義経済建設に試行錯誤しながらも頑張っている諸国の人達と連帯しながら、社会主義経済建設の在り方を研究していかなければなりません、純粋な社会主義などはないのです、国家独占資本主義ですら疲労困憊の状況に陥っているのです、来るべき社会は、社会主義以外ありません。学習を積み重ねることにより楽天的にもなれし、全体の風景を見られるようになります、したがって私達は未来社会にも限りない希望をもつて生きることが出来るようになると思います。

私達の『資本論』研究会のメンバーであった増村氏の、お通夜の日（二〇一六年十二月三日）に。
（鈴木 賢二）

『共産党宣言』と現代資本主義

―「グローバリズム」ということ―

読書はじめ

年始め『共産党宣言』を読んだ。感想をどう記すかと考えていた時、読売が一月三日付から現代資本主義の諸特徴を連載した。第一回めは米国の政治哲学者マイケル・サンデル、二回め（一月四日）はIMF専務理事クリスティヌ・ラガルドへのインタビュー記事である。

現代資本主義における独占資本の経済政策は、「国民協調」の色彩が強かったケインズによる経済政策から、独占資本の世界競争を全面化する政策―これが「新自由主義」といわれる―にとって代えられた。この背景にあるのが一九七〇年代から一九八〇年代、世界を襲ったものすごいインフレと財政赤字であった。独占資本本位の経済政策は、社会主義世界体制の崩壊（資本による世界市場の全面支配）と各国社会主義・労働運動の停滞、資本の自由な貨殖欲を縛る力が弱まったこととあいまって、「グローバリズム」という名のムキ出しの資本主義の発現となった。その結果が貧困と格差拡大、それにとまなう大衆の反乱である。

グローバリズム

「グローバリズム」は現代資本主義に特殊なことではない。中世、世界は台地と考えられた。大航海時代の船乗りたちは世界は「球」（グローブ）であることを航海によつて実証した。グローバリズム、世界市場の始まりである。『宣言』はグローバリズムを資本の価値増殖意欲の現れと、産業革命の時代に資本と世界市場との関係を明らかにしている。

「アメリカの発見、アフリカの回航は、頭をもたげてきたブルジョア階級にあたらしい領域を作りだした。東インドとシナの市場、アメリカへの植民、諸植民地との貿易、交換手段やまた総じて商品の増大は、商業、航海、工業にこれまで知られなかつたような飛躍をもたらし、……大工業は、すでにアメリカの発見によって準備されていた世界市場を作りあげた。世界市場は、商業、航海、陸上交通にはかり知れない発展をもたらした。この発展はまた工業に反作用して、それを大きく伸ばした。そして工業、商業、航海、鉄道が伸びる程度に応じて、ブルジョア階級は発展し、その資本を増加させ、中世から受けついですべての階級を背後におしやつた。」(『宣言』、岩波文庫、四二〜四三頁)

さらにくわしくはこうである。マルクス・エンゲルスは、―資本はグローバルで国籍を選ばない、儲けが得られるならどこにでも出かけていく。世界は資本に似せて「変革」される、と。

「自分の生産物の販路をつねにますます拡大しようという欲望にかりたてられて、ブルジョア階級は全地球を駆けまわる。どんなところにも、かれらは巢を作り、どんなところをも開拓し、どんなところとも関係を結ばねばならない。」

ブルジョア階級は、世界市場の搾取を通して、あらゆる国々の生産と消費とを世界的なものに作りあげた。反動家にとつてはなはだお気の毒であるが、かれらは、産業の足もとから、民族的な土台を切りくずした。遠い昔からの民族的な産業は破壊されてしまい、またなおも毎日破壊されている。これを押しつけるものはあたらしい産業であり、それを採用するかどうかはすべての文明国民の死活問題となる。しかもそれはもはや国内の原料ではなく、もつとも遠く離れた地帯から出る原料にも加工する産業であり、そしてまたその産業の製品は、国内自身において消費されるばかりでなく、同時にあらゆる大陸においても消費されるのである。国内の生産物で満足していた昔の欲望の代りに、あたらしい欲望があらわれる。このあたらしい欲望を満足させるためには、もつとも遠く離れた国や気候の生産物が必要となる。昔は地方的、民族的に自足し、まとまっていたのに対して、それに代ってあらゆる方面との交易、民族相互のあらゆる面にわたる依存関係があらわれる。物質的生産における同じことが、精神的な生産にも起る。個々の国々の精神的な生産物は共有財産となる。民族的な一面性や偏狭は、ますます不可能となり、多数の民族のおよび地方的文学から、一つの世界文学が形成される。」(同、四七〜四八頁)

ここに資本主義の本質が、つまり資本主義がいかに発展し姿を「変え」ようが、グローバルイズムの本質がその根本においてとらえられている。

経営者

読売が新しい年にかつぎ出したサンデル氏は米国の政治哲学者、現代社会をこう絵解きしてみせてくれる。

「(トランプ現象は)一夜で生じた(変化を求めている)渴望ではない。1980年代以来の新自由主義的なグローバル化の果実が1%、5%、10%の最上層の手に渡

る一方、中流・労働者層は取り残され、排除されたと感じてきた。大概の労働者の暮らしは良くならず、一部は悪くなった。中流・労働者層は社会で尊重されず、エリート連中に見下されているとの思いを募らせてきた。怒りと恨みをため込み、変化に飢えてきたのだ。……現行のグローバル化は強烈な個人主義を哲学としている。」と。

現代社会にあつてグローバル化をおし進めるのは独占資本、そして金融独占資本であり、それら資本の人格化としての「個人」＝独占資本家（経営者）である。サンデルがいう「強烈な個人主義」とは独占資本によるムキダシの搾取・収奪欲に他ならない。

こんな主張は今おおはやりで、安倍や日本経団連幹部以外がだれでもいつているように、新しく、新奇で、耳目をそばだてるものでもなんでもない。発刊から今年で一七〇年にもなる『共産党宣言』は近代的工業の発展と労働者と資本の関係をあばき出しみせてくれる。

「近代的工業は、家父長制的な親方の小さな仕事部屋を、工業資本家の大工場に変えた。工場のなかにつめこまれる労働者群は、兵隊と同じように組織される。かれらは下級の産業兵として、下士官や士官の完全な階級組織の監視のもとにおかれる。かれらはブルジョア階級、ブルジョア国家の奴僕であるばかりでなく、毎日毎時、機械によって、監督者によって、なかでも製造家たる個々のブルジョア自身によって奴僕化される。この専制は、営利が自分の最後の目的だと明らかに公言するようになればなるほど、ますますすけちな、ますます意地きたない、ますます腹立たしいものとなる。」（同、五二〜三頁）

この記述を現代にあてはめれば、電通あるいは関西電力での強権的労務管理、強制労働が若く有能であっただろう労働者の自死であり、今や社会問題化し、政府・独占すらとり上げるざるをえなくなつた長時間労働による精神疾患、過労死の増加である。資本はこのようにでかくなればなるほど、競争という法則の結果「けちで、意地きたなく、腹だたし」くなる。

貨幣物神

サンデル氏は得意げに現代社会の矛盾、非条理的な現象をさも「新発見」であるかのようにこう続ける。

「この間に、人々の生活のあらゆる面がカネで勘定されるようになった。この現象を『市場社会』と呼ぶ。売り買いの対象は車やテレビだけでない。健康や教育、人間関係にも値が付けられる。市場の値踏みが人々の暮らしを支配するようになった。市場社会のさなかで、カネのない人々は不幸を痛感している。」

金が中心の世の中だ、おれはこれを「市場社会」と名付けると。資本主義社会が「金中心」の社会であることは、百五十年前に発刊された『資本論』、あるいはその八年前に刊行された『経済学批判』が、商品の貨幣への転化、貨幣の物神性として根本的に説明しているではないか。サンデルのこの主張は『宣言』のひょうせつそのものだ。

『宣言』はサンデルよりもっとくわしく、「ブルジョア階級は、歴史において、

きわめて革命的な役割を演じた」と。もっとグローバルに資本の発展と諸階級・諸階層と社会のあり方を論じる。

「ブルジョア階級は、支配をにぎるにいたったところでは、封建的な、家父長的な、牧歌的ないっさいの関係を破壊した。かれらは、人間を血のつながったその長上者に結びつけていた色とりどりの封建的きずなをようしやなく切斷し、人間と人間とのあいだに、むきだしの利害以外の、つめたい『現金勘定』以外のどんなきずなをも残さなかった。

かれらは、信心深い陶醉、騎士の感激、町人の哀愁といったきよらかな感情を、氷のようにつめたい利己的な打算の水のなかで溺死させた。かれらは人間の値打ちを交換価値に変えてしまい、お墨つきで許されて立派に自分のものとなっている無数の自由を、ただ一つの、良心をもたない商業の自由と取り代えてしまった。一言でいえば、かれらは、宗教的な、また政治的な幻影でつんだ搾取を、あからさまな、恥知らずな、直接的な、ひからびた搾取と取り代えたのであった。

ブルジョア階級は、これまで尊敬すべきものとされ、信心深いおそれをもって眺められたすべての職業からその後光をはぎとった。かれらは医者をも、法律家をも、僧侶をも、詩人をも、学者をも、自分たちのお雇いの賃金労働者に変えた。

ブルジョア階級は、家族関係からその感動的な感傷のヴェールを取り去って、それを純粋な金銭関係に変えてしまった。」(同、四五頁)

「ブルジョア階級は農村を、都市の支配に屈服させた。かれらは巨大都市を作り出し、農村人口にくらべて都市人口の数を非常に高度に増加させ、こうして人口のいちじるしい部分を農村生活の無知から救い出した。かれらは、農村を都市に依存させたように、未開および半未開諸国を文明諸国に、農耕諸民族をブルジョア諸民族に、東洋を西洋に依存させた。」(同、四八頁)

サンデル氏の主張に共感する者は、現状では少なくないと思われる。彼みたいな保守主義者ですら、こういっていると。そういう人たちに、『宣言』のこの一節―ばかりでなく『宣言』―を読むことをすすめるのが、われわれの務めではあるまいか。

サンデル氏はさらに「不平等が極端に広がる中で、市場の価値観が家族や地域共同体への帰属意識、愛国心を曇らせてしまうと、民主主義を維持するのが難しくなる。このことを我々は学んだ。」

ブルジョアの空想

サンデル氏は封建的時代にあった民族主義的、家族的、牧歌的な姿が失われることを嘆く。日本の保守主義者にもこういう輩は少なくない。

マルクスとエンゲルスは労働者階級の成長による新しい社会＝共産主義社会を、彼らの方策・目的とした。サンデル氏は「世界の国が協力し、行き過ぎた資本主義を規制する国際合意をつくること、国家が公共財を充実させて、地域・国家に帰属しているという安心感を国民に与えること」という。

この主張は資本主義的生産関係の根本を変えるのではなく、己の描いた「理想観念」であるブルジョアの改良主義、最大限評価しても「ブルジョアの社会的主義」ではない！

(編集部)

春闘の変質と再生への途(上)

賃金は上がったか

連合会長殿は連合新年会(一月五日)でこうあいさつした。「ご挨拶」の文章はわずか六行、効率化きまわれりだ。

「いま、私たち連合はすべての働く仲間、そして次代を担う人々のため、不条理に敢然と立ち向かい、誰もが将来に不安なく働き、生活できる、持続可能な社会を実現するための運動を展開していかねければなりません。

そのために『クラシノソコアゲ応援団! RENGOKYAMPEN』を通じて、連合の発信力をさらに強化し、社会に広がりのある取り組みを推進していく所存です。」言葉は踊っているのだが、「連合さん、なにやりたい、何やるの」、具体性、意気込みはまったくない。神津会長は就任時、「ぼくは広告塔、組織は事務局長にまかせる」と語っていた。

会長冒頭あいさつで連合運動を理解できる組合員はいない。神津会長の口ぐせは①三年連続して月例賃金改善できたことは今後につながる成果、②「底上げ・底支え」「格差是正」で中小と大手の賃上げ率の乖離を縮小できた、③四つのキーワード(持続性・月例賃金・広がり・底上げ)で社会全体に賃上げの気運を浸透していきたい。賃金が上がったといっても16年春闘の実態は「四％程度」の要求に―賃上げ5779円(2%)、内訳は定昇5014円(1・7%)、ベア990円(〇・33%)。他方社会的負担(社会保険料・税)は高まる一方で、連合「生活アンケート」でも二〇一二年から一六年に賃金は5千円に対し社会保障料は6千円あがった。したがって実質手取りはマイナス千円。

連合方針はわかりづらい。各組合の賃金要求はさらにわかりづらくされている。ここ五年の「連合白書」スローガンから、連合運動の傾向をみる。

〈一三年〉すべての労働者の処遇改善を追求し、「働くことを軸とする安心社会」を実現しよう―賃上げ・労働条件の改善で、デフレからの早期脱却を

〈一四年〉今こそ賃上げ、デフレから脱却―すべての働く者の処遇を改善し、底上げ底支え・格差是正を実現しよう

〈一五年〉賃上げで景気の底支えを!―「休み方」「働き方」改革で長時間労働撲滅

〈一六年〉すべての働く者の処遇改善!「底上げ・底支え」「格差是正」で経済の好循環実現!

〈一七年〉「底上げ・底支え」「格差是正」でクラシノソコアゲを実現しよう! 長時間労働撲滅でハッピーライフの実現を!

大きな傾向としてみるのには①賃上げでデフレからの脱却と景気底上げ、②すべて

の働く仲間の処遇改善は「底上げ・底支え」「格差是正」、③クラシノソコアゲ、長時間労働撲滅でハッピーライフ。この流れからは労働組合の主力である、いわゆる「正社員」の賃上げの姿はみえない。正社員の賃金は高いのか。高くない、低い。なのに、なぜ「大幅一律賃上げ」が消されたのか。

連合会長の口ぐせ

連合会長がオームのようにくり返すのが、「過去の常識で考えちゃダメ、悪しき常識にとらわれちゃダメ」、神津氏がいう「常識」とはなにか。

一、今はデフレの時代、かつてのようなインフレの時代ではない、
二、インフレの時代は前年賃上げプラス α でたかえたとれた。今は①前年度消費者物価上昇率、②生産性向上分、③生活向上分(ベア)の経済整合性論は通用しない。
三、一律ベア要求は大手と中小、正社員と不安定雇用労働者(非正規労働者群)の格差拡大の方向に作用する。

四、格差是正の観点から「大手追従・大手準拠」など発想を転換し、個人別賃金の社会水準確保と相場形成に重きをおく。

五、生産性向上に労資で協力しパイをふやし、その分配を求め、デフレ克服、経済好循環をつくるのが春闘の役割。ストライキで闘う時代ではない。

六、率や額といった数字で判断すべきではない。

連合結成は一九八九年、その前身の全民労連(民間連合)結成は一九八七年だから、二〇一七年は連合にとり歴史的な年となる。

これら発言は階級的労働運動(労働者階級の搾取からの解放を目的とする)を押しつぶした、生産性三原則にもとづく労働運動(合理化、生産性向上に労資が協力し資本主義社会の維持を目的とする)が確立した。連合の基礎はかたまつたとのオゴリである。

「生産性三原則」

前会長の古賀氏は二〇一四年「15年版連合白書」巻頭言に「春闘方式の最大の特徴は、『生産性三原則』の考え方がベース」と書いた。二〇一四年政労資会議は「生産性向上に継続してとりくむことを確認」を強調した。連合は階級的労働運動へのアンチ・テーゼとして政・労・官、国際組織ILOがつくった日本生産性本部が養成・育成した組合だ。

「16年版 連合白書」は、「生産性向上、企業の存続と雇用の安定にとりくむ。付加価値(パイ)を適正分配せよ」と、日本生産性本部の基本的考え方である「生産性運動に関する三原則」を大きくのせた。

「(1)雇用の維持・拡大 生産性の向上は、究極において雇用を増大するものであるが、過渡的な過剰人員に対しては、国民経済的観点に立って能う限り配置転換その他により、失業を防止するよう官民協力して適切な措置を講ずるものとする。

(2)労使の協力と協議 生産性向上のための具体的な方法については、各企業の実情に即し、労使が協力してこれを研究し、協議するものとする。

(3) 成果の公正分配 生産性向上の諸成果は、経営者、労働者および消費者に、国民経済の実情に応じて公正に分配されるものとする。」(「16年版 連合白書」一一頁)。

「雇用の維持・拡大」がいわれる。しかし、「失業はなくさない」と書かれてはいない。「防止するよう官民協力して適切な措置を講ずる」とあるだけだ。「適切な措置」とは①退職勧奨、②希望退職、③配置転換等であり、今や「制度化」され、首切りとはみなされなくされた。

次に労使協議。目的は「生産性向上のための具体的方法」を、労資が協議する。「合理化」はどんどん進み、「過渡的な過剰人員」をつくるためのものとなる。

最後に成果の公正分配。ここでもいわれるのは国民経済の実情に応じて「公正に分配」というだけだ。だが「公正に」を判断するか。労組、それとも企業か。力は企業にある、企業の存続を第一におき、要求がささやかな労組は、お釈迦様の掌にある孫悟空でしかない。

資本の論理―価値増殖―を前提にあるのが生産性三原則に他ならぬ。生産性三原則を認め、これにもとづいた労働運動の展開は労働者を永久に賃金制度の枠内に閉じこめ、したがって賃金奴隷―長時間労働、精神疾患、過労死、自死、強権的労務管理等の企業はブラック―から抜け出せないことは明かだ。

安倍自民党内閣の「番頭」は独占資本の塊・日本経団連であることは日々の生活が明らかにしている。連合の「番頭」が日本生産性本部に他ならぬ。連合は毎日のように、中央・地方で生産性本部と会合し、「友愛」を暖める。旧総評系官公労を除く多くの民間労組は全労生(全国労働組合生産性会議)の傘下にある。だからであろう、「17年版 連合白書」は、いわずともいいことなのに、「今次闘争方針では『生産性三原則』に明示してはいないが」と、わざわざ「三原則」を強調し、「イノベーションを創り出せる『人材』はなくして、日本の社会・経済の未来はない」(「17年版 白書」一六頁)と日本経団連に「賃上げに協力を」とエールを送る。

ボランティア、扶助組織

連合は一月、二〇一四年六月につくられたパンフ「連合の七つの絆―支え合い、助け合う社会づくりのために」を資料として配付した。七つの絆とは①平和、②核兵器廃絶、③人権、④被災地支援、⑤愛のキャンパ、⑥地域・職場・家庭(メーカー)、⑦以上六つでより強固な絆をというものだ。

①②③はオバマ君や安倍君が一般論としてしているのと同じである。④⑤⑥はボランティア、支援でしかない。職場労働者、労働条件は放り投げられている。(つづく)

◇ 読者からのおたより ◇

カストロのキューバ カストロのキューバから私が学んだ二つ。一つはカストロが無私ということ。あとひとつは教育について、解放後すぐに取り組んだ教育のベースは「教育と労働」。①日常的に労働と教育に取り組む労働組合、②地域コミュニティと教育。このことが赤い貴族を生み出さないキューバの社会主義と学びました。

(大阪・K)

『がんを育てた男』 昨年ビデオプレスは、『がんを育てた男』『オキュパイ・シヤンティ』などをつくりました。『がんを育てた男』は友人の木下昌明さんの記録ですが、お任せ医療を拒否し「患者が選択する」その実践内容に反響が広がっています。インドカレー店「シヤンティ」の外国人労働者争議には、最初から最後まで関わりました。「解雇・追い出し・倒産」でハラハラドキドキの撮影でした。今年はこの作品の上映も広げたい。また、メトロモースの非正規裁判はいよいよ3月に地裁判決で、メトロの「総集編」も企画中です。2017年、安倍の暴走は止まらず、トランプは世界をメチャクチャにしそう。ことしもやれることを一つひとつやっていきたいと思っています。

(ビデオプレス 松原明・佐々木有美)

参院選教訓を総選挙にどう生かす 一六年参院選挙は、争点を明確に共同で闘った一人区で勝利しましたが、自公と維新等に3分の2議席を与える結果になりました。神奈川県選挙区でも定数4に対し自公に3議席を許してしまい無念でなりません。参院選結果の教訓を総選挙にどう生かすかが問われています。その1つが「なぜ、安倍政権が高い支持率」を維持しているかです。

とりわけ若年層の投票行動です。私は、これまで以上に「格差の拡大と貧困」をわかりやすい言葉で訴え、政治と社会を変え、戦争をすることなく平和で安心して生活できる社会にするために一緒に考え行動する必要があると思います。総選挙を安保法や原発事故住宅無償提供打ち切り問題を一緒に闘った仲間とともに、3分の2議席阻止するため闘う決意です。HPありがとうござります。

(横浜・塚本鉄男)

ロシア革命100年の年 貧困と格差が世界中で拡大しています。この原因はどこから来て、どうしたら解決できるかは、150年前に『資本論』が明らかにしています。

今年、ロシア革命100年の年です。ソ連の変質と崩壊の根本原因、中国の変質状況、それらの教訓を生かした日本の社会主義はどんな形をとるか、労働者運動の現状と展望等々については、『社会通信』を検索下さい。40年間のバックナンバーと新号が閲覧できます。

ますます反動化を強める独占資本と安倍政権を孤立させることができるよう、われわれが前進できる年にしたいものです。(健闘と健勝を願いつつ。)

(東京・原野人)

カストロ おかげさまで総評オルグ43年目の正月を迎えることができました。二〇一六年は3月9日の世界史上初の、稼働中の原発を止めた大津地裁決定(福井・高浜原発)を受けた「原発全廃! びわ湖一周デモ」5月4〜9日、七一〇人)や沖縄・伊波洋一参議院議員を迎えた「あいば野日米合同軍事演習反対現地集会」(9月10日、六〇〇人)など成功しました。

残念だったことは、キューバのカストロの没。一九七八年夏の第十一回世界青年学生祭典に参加した私は、祭典中の「青年の島」での式典に突然カストロが現れ、あいさつ後欄干を飛び越えて参加者に握手して回り、その民衆に気軽に入っていくささくさに感激しました。

「革命はチャチャチャのリズムとともに」と言われるほど陽気な国。一九五七年に山頂でたった12人が生き残ったとき、「これで独裁者の命数は尽きている」とカストロが宣言し、2年後に革命を達成。キューバの社会主義には情熱と楽天性がみなぎっています。

この参加報告冊子の結語に、私は、「キューバの人は良く頑張ります。キューバの人は、歌って踊ってうかれてばかりいるわけではありません。『祭典準備のためこの10日間、1日2時間の睡眠でやっています』と、たんとんと何気ない顔で語ってくれたキューバ共産主義青年同盟員を思い出します。『祖国か死か』という、閉会集会でのカストロの宣言に学ぶ必要があると思います。いろいろと闘いの自信をなくし、もやもやしているとき、態度をはっきりさせよう。『階級闘争に中立はありえない』、戦術的に必要な妥協はしても、思想的な妥協はありえない」というキューバの不屈さに、私たちは大いに学ばねばならないと思います」と、記述しました。

写真2枚、「突然あらわれたカストロ」&「ゲバラは今もラテンアメリカ人民の胸の中に生きています」と説明してくれたピオニール・チェ・ゲバラ館で、稲村撮影。紅顔の美青年の写真は紙幅の都合で割愛です。滝野さんのカストロの文章に感激された「若狭の原発を考える会」の木原壮林さんが、カストロとゲバラのゼッケンを作製されました。今年も頑張りましょう。(しが・稲村守)